



TITLE:

# 中國天文學の發達とその限界

AUTHOR(S):

藪内, 清

---

CITATION:

藪内, 清. 中國天文學の發達とその限界. 東洋史研究 1969, 28(2-3): 127-138

ISSUE DATE:

1969-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152800>

RIGHT:

# 東洋史研究

第二十八卷 第二・三合併號 昭和四十四年十二月發行

## 中國天文學の發達とその限界

藪 内 清

中國天文學のパターンは、ほぼ漢代にできあがつたといつてよからう。それから後の天文學は、こうしたパターンの中で、ゆるやかな速度で發展したのである。そこには天動説から地動説へと進んだ、革命的なできごとは、ついにみられなかった。

天文學の誕生は、何れの古代文明においても、その文明とともににはじまった。中國では最初の歴史的王朝である殷において、天文學は曆法の分野で誕生した。月のみちかけの周期に従つて、一月を三十日と二十九日の大小に分け、一年の周期に合わせるため、十二か月の一年を平年とし、二、三年に一回の閏月をおき、閏年には十三か月がふくまれた。すなわち殷代には、太陰太陽曆が成立した。しかし當時の太陰太陽曆は、董作賓<sup>①</sup>がいうのとはちがつて、四分曆のような高次なものではなかった。太陰太陽曆で、もっとも難しい問題は、置閏法であつた。四分曆では、十九年に七か月の閏月をおくというメトン周期、さらに七十六年を周期として、季節と月相とが完全に復歸するという、カリポス周期を基礎とするが、

こうした十九年法や七十六年は、殷代にはまだ知られていなかったと思われる。こうした知識は、はるかおくれて、戦國時代に知られたと推定される。<sup>⑧</sup>メトン及びカリポスは、それぞれの名を冠する周期を提唱したギリシアの天文學者であるが、中國人がこうした知識をギリシアから學んだわけではない。殷周の時代、すなわち千年に近い長い期間に中國人自らが、自然の注意深い觀察によつて學びとつた知識であつた。きわめてブラチカルな民族であつた中國人が、實用的な曆法について、ギリシア人より劣つてゐるという理由は少しもなかつた。

四分曆が成立したと思われる戦國時代は、中國文明がもつとも生氣を持つた時代の一つであつた。曆法の確立とともに、天體の觀測、ことに木星（歳星）の觀測が行われ、この位置によつて國々の運命を占う分野説が誕生した。<sup>⑨</sup>すなわち赤道に沿つた天空を十二等分し、これを十二次と呼び、それぞれの次が地上の國乃至二國を支配した。木星がどの次に來るかによつて、支配される國の運命が占われる。この十二次は、多分にバビロンに起つた黃道十二宮と似てゐる。また天空を二十八の不等間隔に分つ二十八宿も早くから中國に知られたが、これもインドに類似なものが存在した。戦國時代は、曆法及び占星術がはじめて組織された時代で、その詳しい内容は漢代の著述、すなわち『史記』、『漢書』などにしるされた。現在の天文學は精密科學の一つであるが、もともと天文という語は、占星術的な立場から考えられた天體現象の意である。『易』繫辭上に「天は象を垂れ、吉凶をしめす」とあるように、天體現象は單なる自然現象ではなく、支配者に對し政治の善惡を告げ、天が支配者への警告を行うものと考えられた。中國の政治思想においては、支配者は天の子であり、天の意志に従つて政治を行うことが政治の理想と考えられてきた。中國における天は、創造神ではなかつたが、政治道德の規準となるもので、政治理念の中心におかれた。天を祭る祭天の儀は、天子の特權であり、また義務でもあつた。このばあい、天の意志は、天體現象を通じて支配者に啓示されたのである。ところで天體現象の中には、比較的容易にその法則性乃至周期性が把握される面と、一見、恣意的でありほとんど人知を越えて理解できない面とがあつた。前者は曆法として體系づけられ、後者は占星術の對象となつた。しかもこの二つの分野は、ともに中國の政治にとって重要な

ものとなった。『史記』にはじまる正史の中に、「律曆志」（『史記』では「曆書」）と「天文志」（「天官書」）があるが、これはそれぞれの分野をとりあげたものであった。天體現象は、窮極的において、人知の理解を越えたものであるという思想は、中國人には牢固として消え去らなかつた。

ヨーロッパの中世は宗教の支配した時代であるが、これに對し、統一國家が成立した秦漢時代からは、中國では政治がすべてに優先した。秦漢の時代に、天子を頂點とする官僚制度が確立し、しかも天子の獨裁制は時代とともに強固なものとなった。天文學もまた、政治の支配をまぬがれなかつた。『史記』天官書では、星座を總稱して天官といつた。天と地との平行性を主張する思想に本づいて、地上の官僚制度になぞらえて、地上の星座にもこの官僚制度に本づく名稱がつけられた。いわば星座も、官制上の名稱がつけられた。しかも「天官書」にはじまる占星術は、天子やそれが支配する國家の運命を占うもので、公的占星術の部類に屬した。この種の占星術は、バビロンに行われたが、ギリシアになると個人の運命を占うホロスコープ占星術が流行しはじめた。占星術の面からだけみても、中國で行われた君主獨裁制が天文學に強く反映していることを知ることができる。ここでは、個人の運命はあまり問題にされなかつた。政治をすべてに對して優先させるという思想は、天文學のいま一つの部分——曆法にも影響を與えた。現在のわれわれにとって、曆法といえば、月日を配當し、週日や祝日を書き込む技術、もしくはその結果に本づくカレンダーの編纂を意味する。しかし中國でいう曆法は、こうした面を包括しながら、いっそう廣範な内容を持った。單に月日の配當だけでなく、日月食の豫報、五星（五つの惑星）の位置計算など、天體現象の中からその法則性が把握できるものすべてが、曆法の對象となった。曆法は、天文計算表を意味した。『史記』曆書では、單に月日を配當する四分曆の計算法が述べられているが、『漢書』律曆志にはじまり、それ以後の正史では、日月食や五星の位置計算をふくめたものが、その内容となっている。天體現象のすべてが、支配者にとって大きな關心事であつたという事實が、ここにも強く反映している。

## 二

秦にはじまった君主獨裁の官僚制度は、漢代において完成された。それと同時に、天文学を研究する機關も、官僚制度の中に組みこまれた。『史記』の撰者司馬遷は、こうした官廳の長官である太史令となった。司馬遷のばあいは、それ以前の傳統に従って史官を兼ねていたが、やがて太史令は天文学研究の専門職となった。天文学研究の官廳とその長官の名稱は、時代によっていくぶん變化はあるが、しかし何回となく行われた易姓革命を通じ、二千年以上を通じてこの制度は存続し、清末に至った。この官廳では、曆法の研究と曆書の頒布、公的占星術のための天文觀測が中心であり、附隨する業務として漏刻の管理と報時、日の吉凶を豫測する一種の占星術とがあった。もちろん重要な分野は、前二者であった。

ヨーロッパの中世は、皇帝の權威はローマ法王によって保證された。しかし中國のばあいは、ローマ法王の如きものは存在しなかった。従って支配者は自らの方法によって、新しい王朝の成立を權威づける必要があった。それは各種の制度を變更することであつたが、そうした制度の一つとして「改正朔」、すなわち改曆が行われた。漢代の初期以來、この問題は幾度かとりあげられたが、武帝の太初元年（前一〇四）に至って、はじめて成功した。すなわち太初曆による改曆であつた。この太初曆は、前漢末の劉歆によって増補され、三統曆と名を變えた。これが『漢書』律曆志に收録されたものである。

漢代において、中國天文学のパターンがきまつたというのは、次のような意味である。まず天文学の研究範圍が限定されたことである。公的占星術のための天文觀測と、月日の配當をふくめ、日月食や五星の位置計算を行う曆法とが、官僚としての天文學者の主要な仕事であつた。漢代から六朝にかけて、蓋天説とか渾天説とかいった、宇宙構造論の問題がとりあげられたが、唐代になると、こうした議論は無用なものと考えられ、それ以後はほとんど問題とならなかった。研究範圍の限定はまた、曆計算の面にも及んだ。上述したように、中國の曆法は廣く天體現象を對象とする。ギリシアでは地

球中心の宇宙モデルを考え、それぞれの天體位置を圓運動の組合せとして計算することに成功した。こうした幾何學的モデルの考想は、ギリシアの數學において幾何學がもつとも發達したという事實と結びつくのであろう。ユークリッド的な幾何學を缺除し、算術や代數計算にすぐれた能力を發揮した中國人は、現象を説明するための幾何學的モデルを考えることなしに、現にみえる天體現象の中に法則性を見出すことに成功した。初期の曆法では、日月が一太陽年と一朔望月を周期として、その運行を規則正しく行うことが知られた。中國の曆法が天體現象の法則性を發見したというのは、こうした周期の發見であつた。中國人はすべての現象がある種の周期によってくりかえされることを確信した。三統曆では日月食が一三五か月の周期<sup>⑥</sup>でくりかえされるものとしてその法則性を發見したし、また惑星の運動が會合周期のあいだに、規則正しい變化を行うことを知つた。もちろんこうした周期だけでは、十分な豫報は不可能であつて、漢代以後に計算方法に改良が加えられたが、基本的には天體現象の法則性は周期によつて規制されるという考えは、後々までもつづいた。

宇宙の幾何學的モデルを考えることは、實際に天體がどのような状態にあるかを想定することである。例えば日食は太陽が月に掩われるために起る現象であるという物理的意味づけは、ギリシアの天文學者によつて早くから行われた。しかし中國の曆法では、こうした意味づけは、あまり強調されることはなかつた。「律曆志」が目的としたのは、天體現象の豫報を如何に行うかであつて、その物理的意味づけではなかつた。しかし事實において、中國の天文學者がこうした現象の奥にある姿を全く知らなかつたわけではなかつた。しかし彼らは正面から物理的意味づけをとりあげようとしなかつた。一言にしていえば、彼等にとつて必要なのは計算の結果が現象と一致することであり、計算の理論的基礎づけではなかつた。こうした曆法の性格が漢代にできあがると、それは理想的なモデルとして後世にうけつがれた。

中國における天文學のパターンが漢代にでき、しかもそれが固定化したことは、まず中國の政治組織の中で理解されなければならぬであらう。君主を頂點とする中國の官僚制の中に、天文學の研究が組みこまれたことは、どのような結果を天文學にもたらしたであらうか。それは確かに天文學の發達に有利な面はあつた。王朝が交替しても、國立天文臺の制

度は依然として存続し、そこでは天文觀測が絶えず行われ、曆法の改良が検討された。曆法は王朝のシンボルと考えられ、曆法を國家の大典とみる表現は後までそのまま残ったが、しかし事實上において曆法への重視の程度は管代以後、ようやく弱まってくる。しかしながら、國家の保護を受けることによって、きわめてゆるやかながら、天文學者の努力によって曆法は改良され、多くの觀測資料が増して行つた。しかし學問が政治に支配され、官僚制の中で育成されたことは、好ましい結果だけをもたらしたのではなかった。易姓革命によって新しい王朝を建てた最初の支配者は、いつのばあいにも、革新的なエネルギーの持主であつた。しかし二代三代と進むにつれ、彼らは政權を維持することに執着し、保守的とならざるを得ない。官僚制の中にくみこまれた天文學者たちは、職務としてきめられた業務を守り、それ以外の仕事を敢えて行おうとしなくなった。こうした天文學者の保守性の中からは、革新的な研究が生れにくいことも、また當然であつた。過去の中國では、君主獨裁制の官僚制が持續されてきたように、天文學のパターンはその政治形態と同じく、根本的な變化はついにみられなかった。このように述べたからといって中國の天文學に發展がなかったというのではない。後漢時代に行われた月の運動における不等の研究、六朝末における太陽運動の不等の發見、隋の劉焯による補間法、唐代における日食計算法など、元の授時曆に至るまで、絶えず新しい研究が行われた。しかしこれらの發見なり研究なりは、曆計算の改良に必要な知識であつて、曆法が中國天文學の主流であるという事實は、全く變らなかつた。

### 三

中國の官僚制において、科學の制度は重要な役割を持った。隋以後に確立した科學の制度の中で、君主の獨裁制はいよいよ強められた。科學の制度が中國における自然科學の研究を妨げたという説は、清末の政治家や學者によってしばしば唱えられた。彼らによってこの制度の缺陷として指摘された理由の一つは、科學の試験が儒教の經典と詩文に通過することによって合格が可能となることで、新しい時代を切り開く科學技術を學んでも、榮達への道に役立たないということ

あった。もちろん科擧の制度にも、すぐれた點はあった。日本の封建制度にみられたような世襲制は、中國のばあいにはなかった。科擧はほとんどすべての人に開放され、才能と努力によって進士に合格すれば、榮達が約束される。もちろん競争者は多く、進士となることは容易でなかったが、この制度が果してきた役割は大きかった。中國の封建制が長く持續されてきた上に、この制度は缺くべからざるものであったと思われる。しかし清末の學者が指摘したように、才能に恵まれた人々の多くが、經典と詩文を學び、科擧技術を輕視するようになったのは、當然の成行であったといわなければならぬ。もちろん進士に合格し、榮達への道を約束された人々の中にも科擧技術の分野、ことに曆法に深い關心を持ち、自らも研究した人々が皆無であつたのではない。曆法の問題は、もちろん國立天文臺の主管であつたが、中國のばあいには、他の官廳の役人もこの問題に介入することが、しばしば行われていた。しかし國立天文臺の主要な構成メンバーである下級官僚は、専門職であつて、榮達への道ははじめから閉ざされていた。彼らはきまつたルーティン・ワークを義務として行い、しかもそれさえも適當にごまかすことにもなつた。彼らのほとんどは、科擧の制度の恩恵を受けることはできなかった。科擧の制度は、政治的人間の養成には役立つたが、科擧技術の發達のためには、かえつてマイナスの作用として働いた。こうした中國の封建性と對蹠的なのは、江戸時代の世襲制度であつたといえよう。日本のばあいには、幕末になつて身分制度は次第にくずれてくるが、それ以前には士農工商の區別ははっきりしており、支配階級である士の身分も固定していた。彼らがいかに才能があり、また努力しても、立身出世への道はほとんど閉ざされていた。優秀な人材は、ヨーロッパに對し僅かに開かれた窓——長崎を通じて、新しい科擧を吸収し、彼らの不滿を發散した。こうして江戸時代に蘭學が起り、やがて明治維新へと進んで行った。

すべてのものに、裏と表があるように、中國社會がすべて政治優先の原則に従つたことは、すぐれた點であると同時に、中國の進歩を妨げる障害となつた。過去の歴史をふりかえると、政治力の弱まつた時代に、むしろ多彩な學術研究が活潑に行われてきた事實が認められる。戰國時代に諸子百家の活躍があつたこと、六朝末から隋にかけて、曆法が劃期的



な進歩を行ったこと、金元の交替の時代に、李朱醫學が起り、天元術の發明、さらに授時曆編纂の準備が行われたことなど、いくつかの事實が指摘されるのである。もちろん政治的動亂は、しばしば學問研究の新しい芽をつみ、萌え出ずるエネルギーを中絶してしまふことがあつた。例えば北宋の没落がそうした事實のよい例となるであらう。北宋時代は科學技術の面で、古代の集大成が行われると同時に、新しい問題への意欲がみられ、高次のアカデミックな研究が進められようとした。しかし金の南下によつて北宋が減んでしまつたあとには、華北のみにアカデミックな傳統が残つたのに對し、南宋が支配した華中及びその以南の土地では、庶民を中心とした學術が盛んとなつた。こうした分離は元の時代にもつづいたが、華中が中國の經濟を支配するようになるにつれ、華北のアカデミックな學問は、次第にその傳統を失つてきた。それに代つて、庶民を基盤とする學術のみが盛んとなつた。明代における學術の衰微とは、すでに北宋の滅亡とともに始まつたといえるのである。もちろんこうした庶民の學術も、強力な政治の支配から免れなかつたことは、いうまでもない。ニードム博士は、『中國の科學と文明』という大著の中で、十五世紀までの科學技術は、東と西とに大きな隔たりはなく、むしろ多くの發見と發明によつて、中國がまさつていたことを、しばしば強調している。十六世紀の初頭、ポルトガルはインド經營の後に中國に進出してきた。この時になつて、ヨーロッパの科學ははじめて中國に先んじていることが、知られるようになった。多數の耶蘇會士の入國とともに、ヨーロッパの科學書が漢譯された。ことにヨーロッパの科學に深い信頼を寄せた徐光啓は、西洋天文學を基礎として改曆を行うことを提案した。彼は禮部右侍郎から禮部尙書に進んだが、禮部はもともと儀式とか制度とかを管轄する官廳であり、曆法の問題にも大きな發言權を持っていた。彼の提案は容れられ、まず西洋天文書の一大集成ともいふべき『崇禎曆書』の編纂が行われた。しかし徐光啓が計畫した改曆は、徐光啓の死と、つづいて起つた明の滅亡によつて、ついに明代では成功しなかつた。しかし清朝の下で、順治二年から西洋新法に本づく時憲曆の頒布によつて、徐光啓の遺圖は實現された。徐光啓が改曆の準備としての『崇禎曆書』の編纂をはじめることができたのは、もとより彼が官僚として高い地位にあつたことが原因しているが、しかし曆法の問題は中國天文學の

主流であったこと、さらにしばしば徐光啓がいつているように、西洋天文學からは單に計算法や天文常數などを借りるだけであつて、そうした知識を大統曆の鑄型に鋳かしこむだけのことであつた。大統曆は、明一代に行われた曆法であり、元の授時曆をほぼそのままに踏襲したものであつた。西洋天文學をとり入れたといつても、中國天文學のパターンはそのまま持續することであつた。従つて、保守派の反對を抑えることも、徐光啓の力によつて可能だったのである。しかしこの結果、明清交替の期間を通じ、ヨーロッパの天文學がかなり傳つたのにもかかわらず、新しい天文學への展開は起らなかった。

#### 四

以上、中國の學問が政治の支配を強く受け、そのために天文學が持續的に研究されることになり、ゆるやかながらも、そこに進歩があつたこと、しかしその反面、本質的に大きな變化のなかつた官僚制度は、一度きまつた天文學のパターンを恒久化し、新しい研究への發展を阻止する役割を果たしたことを述べてきた。中國における天文學の發展とその限界は、こうした中國社會の組織と、組織を動かした政治思想によつて、決定的なものとなり、そこには近代天文學の勃興はついにみられなかつた。しかしこの中國社會の持續性は、一に中國が置かれた地理的環境に決定的な原因があるといわなければならない。三方は山と砂漠に、一方は海を境界とする中國には、外國からのあらゆる侵入を妨げるのにもっとも都合であつた。もちろん北方民族の侵略は絶えず中國を悩ましつづけ、元や清のように、北方民族が中國を支配したことがあつた。しかし北方民族は、中國より低い文明しか持ちあわさなかつた。高い文明を持ったインドやイスラム、さらにヨーロッパの文明は、佛教の傳來を除けば、ごく僅かな影響しかもたらさなかつた。天文學についていえば、唐代にインド天文學、元明にイスラム天文學が傳わつたが、こうした天文學は中國のそれに比べて、それほどすぐれた精度を期待することはできなかつた。明清時代のヨーロッパ天文學は、主として十五、六世紀の成果に本づくものであり、中國の天文學よりまさつていゝといえ、これを傳えた耶蘇會士は、決して天文學の専門家でもなければ、ましてや中國の天文學を

根本から變革しようと努力したわけではなかった、彼らはキリスト教布教の手段として、中國のそれよりも優位にあったヨーロッパ天文學を紹介したにすぎなかった。天文學のパターンを根本的に變え、同時に中國社會を變革させるような外部の力は、阿片戰爭以後にはじまったのである。

中國に比べて、はるかにめざまれた地理的環境におかれたのは、ヨーロッパのばあいであった。中國全土よりせまい地域の中に、言語を異にし傳統のちがった多くの民族が國をつくり、それぞれにヨーロッパ文明の形成に参加したのである。しかもヨーロッパ文明の形成は、ヨーロッパ人以外の力が加わった。このばあい中國の貢獻は無視できなかった。イスラームを通じてギリシアをはじめ、はるか遠くから中國の文明が傳えられた。中國から傳わった火藥によって戰爭の様式は一變し、騎士階級の没落に代って民衆の擡頭をうながした。また中國にはじまった製紙術と印刷術とは、これまで貴族や僧侶に獨占されていた學問を、廣く民衆に開放することになった。こうして民衆は大きなエネルギーを持つようになり、ヨーロッパの社會は中世から近代へと大きく變化して行つた。彼らはアメリカを發見し、また喜望峰をまわってアジアへ進出することに成功した。ここにも中國で發見された磁針が大きな役割を果たした。近代科學は、こうしたヨーロッパの變革によって、はじめて生れることができた。しかもガリレオやケプラーを生んだイタリアとドイツが、戰爭の被害を受けて長い沈滞に陥いつた時に、イギリスではニュートンが活躍し、やがてまたフランスを中心とする大陸に、近代科學の舞臺は移った。近代科學がヨーロッパで起つたのは、ヨーロッパ人が特にアジア人よりすぐれていたからではなかった。中國と比べる時に、その地理的環境の優位は動かしがたい。ゲルマンの移動によつてはじまった中世の暗黒時代のあいだ、ヨーロッパの諸民族は長い苦惱を耐えしんで來た。この期間を通じ、諸民族はそれぞれ自らの傳統を形成し、それを中核として多くの獨立國家がつくられた。せまい地域の中ではげしい競争をつづけてきたヨーロッパの國々は、イスラムとの接觸を直接の契機として、單一のヨーロッパ文明、近代科學の形成に進展して行つた。過去における中國の不幸は、それは、ほぼ單一の漢民族によつてつくられ、しかも強力な外來文明の壓力を受けなかったことであつたといわなければならない。

## 註

① 董作賓『殷曆譜』（一九四九）をはじめ、同氏の多くの論文で論ぜられている。なお中國天文學の詳細については、筆者の近著『中國の天文曆法』（平凡社、一九六九）を参照されたい。

② 新城新藏『東洋天文學研究』（一九二八）三〇ページには、ギリシアのメトン（前四三二）及びカリボス（前三三四）に先んじて、十九年法及び七十六年法が中國で知られていたという。四分曆はまた七十六年法とも呼ばれる。

③ 分野説に従い、木星の位置によって星占いを行うことは、先秦の古典である『左傳』及び『國語』に詳しい。

④ 唐代の資料によると、天文學者の豫報がはずれ、日食が起らなかったばあい、もともと起るべき日食が、天子の善政によって實現しなかったとして、高官たちが天子に祝辭を述べている。筆者編『中國中世科學技術史の研究』（一九六三）一九ページ参照。

⑤ ギリシアで知られた食周期は、いわゆるサロス周期（二三か月）であって、三統曆のそれとはちがう。漢代になって度数による天體位置の表示が行われたが、全天を三六〇度に分つバビロンの方法とちがう、太陽が一日に一度を動くと考え、従って一年の日数と全天の度数と同じ數値であるとした。こうした相違はあるが、漢代にはじめて渾天儀が使用され、しかも測定された度数は赤道と北極を規準とした。しかも黃道座標も現行のものとはちがう、いわゆる極黃道座標であったことから、ギリシア天文學の影響が前一世紀のころ中國に及んだのではないか

と推定される。『中國の天文曆法』一三ページ参照。

⑥ 唐代には日月食の計算法がよほど改良されたが、その計算法を吟味することによって、例えば月食は、月が地球の影に掩われる現象と理解し、しかもその時々月の月の眞運動を考慮して、詳細な計算を行っている。筆者著『隋唐曆法史の研究』（一九四四）一〇四ページ参照。

⑦ 晉以後、曆法を王朝のシンボルとみる思想は現實に衰退した。その結果、一つの王朝の下で數回の改曆が行われたことも、決して珍らしくなくなった。

⑧ 例えば康有爲やその弟子の梁啟超など。しかし事實上、科學の制度が廢止されるのは、清が滅亡する僅か六年前であった。

⑨ こうした専門職には、容易に人材が得られないため、しばしば他の部局への轉出が禁止された。

⑩ 宋沈括の『夢溪筆談』卷八には、當時の天文學者の如何に業務を怠ったかを述べている。天文臺は宮廷の内外に一つずつ置かれ、それぞれ獨立の觀測を行うことになっていた。異常な天體現象が発見されると、宮廷内の天文學者は即刻その結果を天子に報告した。翌朝、宮門が開かれた後、その觀測が正しかったかどうか、宮廷内での天文觀測によってチェックされることになっていた。ところが二つの天文臺では、あらかじめ打合せを行い、時には觀測事實を作りあげた。

⑪ こうした學問の分離の結果、金元の侵略によって、庶民を中心とした學問、例えば民間數學の如きが發達するようになった。筆者編『宋元時代の科學技術史』（一九六七）、八一—一六ページ参照。中國でも、宋元明を経て華中を中心とする都市の繁

榮があつたが、ヨーロッパ中世末期とはちがい、都市に對しても政治の支配は強く、庶民のエネルギーは十分に高まることができなかった。

⑬ ーナム博士は、*The Science of Science*, 1964 (邦譯『科

## 〔附論〕傳統醫學の問題

日本では明治初年に傳統醫學——漢方醫學の問題は片づけられた。西洋醫學を修めたものでなければ醫師の免許状を受けることができなくなったからである。ところが中國では、漢方醫學はそのままに残っているというより、現在きわめて重要な役割を果たしており、政府もその重要性和有効性をさかんにとりあげている。最近の人民中國などには、毎號のように漢方醫學の問題をとりあげている。それは單に有効性だけの問題ではなく、政治路線につながるものとして考えられる。裏切者の代表となった劉少奇は、西洋醫學を尊重し漢方醫學を輕視したとして、はげしく非難されている。

シエーマ的にいえば、西洋醫學は都市のブルジョアに奉仕するもの、それに對し漢方醫學は農村勞働者に奉仕する

學の科學』、法政大學 一九六九年)の中に、『東と西における科學』なる論文を寄稿し、その中で *stagnation* (停滯) という言葉は全く中國に適用できないとし、これに代つて、中國の文明は *homeostatic* であつたとしている。

ものとしてとらえられている。だから農村勞働者を基盤とする現政權が、漢方醫學を重視するのは當然である。こうしたシエーマの形成には、かなりナショナリズムの背景がある。それと同時に、過去の歴史にも原因がある。中國に西洋醫學がはいつたのは天津條約以降のこと、長いあいだ宣教師醫師による病院や中國人醫師の養成が行われた。これらの病院は都市に集中し、治療を求めるのはブルジョア層であつた。醫師養成においては、少數のエリートをつくる方針がとられた。こうして中國における西洋醫學は、植民ブルジョアに奉仕する醫學とみられる経過をたどつてきた。もちろん都市周辺の農村には、いくらか西洋醫學がはいつた。しかし保守的な農村は、新しい治療法になじもうとしなかった。

中華民國の時代は、西洋醫學が尊重された時代である。しかし國內の混亂によつて醫學教育は十分に行われず、日